

# 現代短歌分類辭典

第三十二卷

津端修編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第三十二卷

昭和四十七年八月十日発行

定価五五〇円

著者発行  
兼印刷者

津 端 修

〒  
164

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津 端 修

振替 東京 六七三四一番  
電話 三八七局八四二九番

## 凡 例

- 一、明治、大正、昭和三代に詠まれた歌三十七万八千首を分類した。
- 一、分類の基準は単語を中心とし、単語には、ことごとく品詞名をつけた。
- 一、単語の排配は、五十音順に従った。
- 一、序文集は第十二巻にある。
- 一、歌は原作の仮名遣いにしたが、初版本に拠る方針をとった。
- 一、歌の下にある記号は歌集名の略符号である。
- 一、単語の説明は、新仮名遣いに従った。

次（第三十二卷）

1

〃 〃 〃 〃 九三 〃 〃 九二 九〇 〃 七〇 〃 〃 〃 〃 六九 六八



|     |   |             |   |   |
|-----|---|-------------|---|---|
| 一〇六 | 〃 | 阿弥陀寺        | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | あみー佇てーり     | 一 | 一 |
| 一〇七 | 〃 | 網棚          | 三 | 一 |
| 〃   | 〃 | 阿弥陀に        | 三 | 一 |
| 〃   | 〃 | 阿弥陀如来       | 三 | 一 |
| 一〇八 | 〃 | 阿弥陀の御仏      | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | 阿弥陀仏（あみだぶ）  | 一 | 一 |
| 一〇九 | 〃 | 阿弥陀仏（あみだぶつ） | 五 | 一 |
| 〃   | 〃 | 阿弥陀仏鼻       | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | 阿弥陀ほとけ      | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | あみたまふ       | 一 | 一 |
| 一〇四 | 〃 | 編みためーて      | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | 編みーたり       | 一 | 一 |
| 一〇五 | 〃 | 浴みーたり       | 三 | 一 |
| 〃   | 〃 | 編みーたる       | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | あみーたる       | 一 | 一 |
| 〃   | 〃 | 浴みーたる       | 二 | 一 |

網地島  
 あみーつ  
 編みつぐ  
 網づくろひ  
 糖蝦漬(あみづけ)  
 浴みーつつ  
 編みーつつ  
 あみつづけゐるーなり  
 網綱  
 浴みーつる  
 浴みーて  
 編みーて  
 同  
 網戸  
 網灯籠  
 網床  
 網戸越

一 一 三 一 一 一 四 七 一 一 一 三 二 元 三 七 三 一 一 一

二〇 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

あみーながら  
 浴みーに  
 浴みーにーき  
 浴みーにーけむ  
 浴みーにーけめ  
 浴みーにーけり  
 浴みーにーし  
 浴みーにーつつ  
 浴みーぬ  
 あみーぬ  
 あみの浦わ  
 網の目  
 網の目状  
 アミーバ  
 あみ針  
 編引き  
 網船

二 六 三 一 一 六 二 二 四 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

二五 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二





あまり―て【動詞・助詞】

朝風にかりかりとあぐる真帆の張り孕みあまりて船傾けり①

荒木 暢夫

朝顔のからみあまりて垂れさがる蔓に上向きに咲く花は藍

小田切浪彦

朝なさな挽ぎとる胡瓜今朝もまた策にあまりて取りこぼしつつ⑦

菊池 知勇

青笹を敷きて竝ぶる鯛の尾の反のゆゆしさ籠にあまりて②

河野 慎吾

憤り胸にあまりて眼のまへに群る人を見つめたりけり③

菅 半作

石の辺にいくつ薄の穂はそよぎ日ざしあまりて恋しきものを⑪

北原 白秋

頂をおほひあまりてなだらかに石楠群は谷にかたむく②

小宮良太郎

一心にひとつことのみ思ひつめ思ひあまりて散るさうびかな⑤

茅野 蕭々

入ればすぐ席にあまりて寝る人の靴のうら動く頭の上に⑪

尾上 柴舟

姥捨の棚田の青は山裾をめぐりあまりて野に広これり③

小田 観螢

大樟の力あまりて逞ましき太しき枝はゆがまへて立つ

中村 三郎

あまり―て

あまり―て

かはゆさに余りてなるや故もなく君を憎むに心つかれぬ②

瓶にあまりて 焼場の板に残しきつる かの灰の屑よ心にのこる①

君が歌才に余りて見ゆれども飽き易きかな心添はねば④

君とわれかかるえにしの彩糸のあまりて誰の思つづるや③

草敷きて千総の藤を観るけふの幸は余りて眠気催す④

雲といへば光恋<sup>こほ</sup>しき玻璃の戸にあまりてしろく春は闌けつつ⑧

苦しさをつつみあまりて出しちまた霧のともしの影さへ暗し②

恋しさのあまりて胸のいたむころあ遠びとのなどてかへらぬ①

拒まん力あまりてふるふ声をうひうひしとや笑みてなだむる①

様々に思ひあまりて兄君の一人はほしき秋のくれかな①

三里にも余りて黒し西日して榛名の山の押せる倒影⑭

しかはあれと思ひあまりて往きゆかばおのがゆくべき道あらむかな③

前田 夕暮

西村 陽吉

半田 良平

金子 薫園

吉野 秀雄

北原 白秋

森園 天涙

富田 碎花

石樽 千亦

佐佐木 信綱

與謝野 寛

九條 武子

蓴菜を掬へば水泥<sup>みどろ</sup>掌にあまりて照り落つるなりまた沼ふかく②

溪の岩をおほひあまりてゆたかなる楓もいまだ紅葉に早きか②

中尊寺夏をひそかに杉群の匂ひあまりて樹脂したたらす

机うちて我とわめきつ故しらぬ憤ろしさ胸にあまりて⑤

つつみにも人はあまりて隅田がは小田のくろゆくはなざかりかな

長雨に湿る畳の不気味さも月に余りていつか馴れにし

情すぎて恋みなもろく才あまりて歌みな奇なり我をあはれめ⑤

南天の実の粒青し師の庭におもひあまりてむなしくはゐつ①

憎しみの余りてけだし殺しけむ憎しむ心われは与<sup>くみ</sup>せず①

庭の木の立ち枯れ見れば、白じろと、幹にあまりて、虫むれとべり

庭の面にさ蕤敷きて干す粃の干しあまりてか路にまで乾す④

橋の上に散りて香に立つ白き花のこぼれあまりて池にも浮ける⑤

あまりーて

北原 白 秋

小宮 良太郎

若 尾 鶴 子

窪 田 空 穂

小 出 粲

若 林 牧 春

與 謝 野 寛

荒 木 暢 夫

花 田 比 露 思

釈 迢 空

半 田 良 平

松 田 常 憲

あまりーて

ひと恋ふるおもひあまりて胸いたむところをのせて夜の汽車にあり①

富田 碎花

ふる雨に庭の諸木のぬれそぼち余りてぬらす庭先の下駄を①

豊島 晃

細茎のむら葉まさをく盛りあがり鉢に余りて垂るる石竹①

川浪 磐根

御帳の裾いささか照す灯の光余りて及ぶ静けき群に⑫

尾上 柴舟

燃ゆるもの内にこもりて形なさず論じあまりて丘をまたのぼる

加藤 克巳

雪ふかき落葉の木の間入日さしあまりてここの窓を染むるも

若山 牧水

指尖のふとりをおぼゆ薄原二里にあまりてわが来つらむか⑦

尾上 柴舟

よろこびも悲しみもわれに知りつくす歳のあまりてよぶ声のあり⑤

梶富 照子

わか葉さすかげなつかしさにはとこのえだに余りて露ぞこぼるる

昭憲皇太后

尾とかしら皿にあまりて盛られたるやまめの魚をほめつつぞ食ふ①

神原 克重

あまりなえ【名詞】〔余り苗〕

いつしかに月の光のさす畔に余り苗乞ふと友を待ち居り⑥

石川 秀

## あまりに【副詞】

ああ無言なることも土に親むこともわれにはあまりに無しよ老タルシス⑦土岐善麿

赤とんぼ羽きらきらと光り散り午後の日ざしのあまりに暑き⑥

佐佐木信綱

秋の空廓寥として影もなし　あまりにさびし　鳥など飛べ①

石川啄木

秋の野にあまりに真赤な曼珠沙華その曼珠沙華取りて捨ちよやれ②

北原白秋

秋の日のかげはあまりに白くして浴ぶるこの身もありと思はなくに②

岡崎義恵

秋の山あまりにさびし生きながらすだまと人のなるべうさびし①

小杉放庵

秋晴れやあまりに山の事なきに用なき峯の名もとひてみる④

尾上柴舟

悪夢にも心あまりにおどろかず憂き旅寝にも馴れにけるかな⑬

吉井　勇

暁の窓あまりに近く迫り立つ富士に向ひて呼吸をし吐かず⑬

尾上柴舟

朝の戸のその子あまりに口疾なりし緋桃かしこく日記いつはらぬ

與謝野晶子

あたり前のことと言ひ居るに口吃り記者の筆記のあまりにせはし⑤

梶富照子

あまりに

あまりに

あぢきなく指に泥しぬ白百合の折れて伏すをばなげくあまりに

原田 琴子

あの大地の上でおれは今まであまりにあくせくと働いてゐた⑫

土岐 善麿

仰げば心怖る、眼をおとせばなほ悲しまる、あまりに雪の光れば①

尾山 篤二郎

あまりにあやまりおほき答案を見し現<sup>あき</sup>らめて寂しくなれり④

半田 良平

あまりに静かにたえし御息のゆりまつらばふと覚めたまはじや①

山川 柳子

あまりにただ信ぜらるることの苦しさにながす涙とはなほしも思はざりき⑬土岐善麿

木下 利玄

あまりに汝が泣きさけび寝ねぬ夜をいかりし事し今はさびしも②

北原 白秋

あまりに速く冷えて凍<sup>こ</sup>れば霰の玉しら玉のごともころげたりけり

山川 柳子

あまりに日が暖く静かなればふと手習をせんと思ひつ①

土岐 善麿

あまりに貧し あまりに貧しき人々を遂に憎めり 何にも知らず

若山 牧水

あまりに身近に薔薇のあるに驚きぬ机にしがみつきて読書してゐしが

尾上 柴舟

あまりに御帳<sup>みとばり</sup>近みしづたまきいやしきわが身わがこちせぬ⑧

尾上 柴舟